

保育者志望学生の運動有能感と 運動指導への自信や意識・主観的健康度との関連性について

日比 健人

キーワード：運動有能感、運動指導、自信、主観的健康度

背景と目的

近年、子どもの体力や運動能力の低下が課題となっている。平成 30 年度のスポーツ庁の全国体力・運動能力、運動習慣等調査において、小学 5 年生の男子の体力合計点の平均値は平成 20 年からほぼ横ばいのまま変化がなかった一方で、女子の体力合計点の平均値は平成 20 年からの調査の中で最高値を示したと報告されている。しかしながら、昭和 60 年度の調査結果と各テスト項目結果を比較すると、小学 5 年生の反復横跳びを除き、児童の半数以上が昭和 60 年度の平均値を下回っているとも報告されている。また、平成 28 年度のスポーツ庁の全国体力・運動能力、運動習慣等調査においては、入学前の外遊びに実施頻度が高いほど、入学後の運動・スポーツ実施状況が高いことや、体力合計点が高いことも明らかとなっている。子どもの体力や運動能力には幼児期の運動習慣や運動経験が大きく関わっていることが言え、これらを保証する保育士や幼稚園教諭の役割は非常に大きいことがうかがえる。

また、幼児期は、神経系の発達が著しい時期であり、様々な運動能力や運動技能の基礎を獲得する重要な時期である。杉原ら（2004）は、運動能力の発達について、直接的に影響を及ぼしているものは運動経験であり、間接的に影響を及ぼしているのは遊びの友達の数、家族構成、親の意識といった心理社会的環境や遊び場の有無や運動遊具の数といった物理的環境であったことを報告している。このように運動能力の発達の直接的な要因は子ども自身の運動経験であるが、この運動経験の場を保証し、コーディネートするのは、保育の場において保育士や幼稚園教諭であることが多い。これは杉原のいう、間接的要因にあたり、運動発達には直接的には影響を与えないが、子どもの運動能力の発達において非常に重要な要因であるといえるであろう。

このように、運動能力や運動技能の基礎を獲得する重要な時期に子どもたちと携わる保育者の役割は大きいですが、その保育者自身の運動に対する態度や意識が子どもたちへの指導に与える影響も大きいといえる。中でも、運動有能感は、運動・スポーツ活動に大きな影響を与えている。この運動有能感は、岡澤（1996）が提唱したものであり、運動に対する自信(有能感)のことである。この運動有能感は3つの因子から構成されている。自己の運動能力や技能に対する肯定的な認知、「自分はできるという自信」である身体的有能さ、自己の努力や練習によって運動

がどの程度できるようになるかという見通し、「練習すればできるようになるという自信」である統制感、運動場面において指導者や仲間から自分が受け入れられている認知、「みんなから受け入れられるという自信」である受容感の3つである。運動有能感を高めることは、保育者の運動・スポーツ活動への態度や意識を高める大きな要因になることが考えられる。

中曾根（2018）は保育士の身体的有能さの認知と運動遊び指導の関係について、身体的有能さの認知が低い群においては、自身が運動やスポーツをすることが好きではないと回答した者が多いことや、運動について自信がない者、子どもたちへの運動指導時の不安感や苦手意識を強く感じている者、運動遊びを子どもたちと共に行うことが好きではないことなどを明らかにしている。運動指導を行う上では、指導を行う運動技能の理解や習得のみならず、運動に対する態度や意識も大きな影響を及ぼすことが考えられる。このように、運動有能感が低いと、自身の運動・スポーツ活動への態度や意識も低下するほか、運動指導にも影響を及ぼす可能性が考えられる。

そこで本研究では、今後現場に出て指導を行う、保育者志望学生を対象に、運動有能感と運動指導への自信や意識、そして主観的健康度の関係について、調査・検討を行うことを目的とする。

方 法

(1) 対象者

2018年11月に、保育者養成課程に所属する短期大学生92名を対象に、調査の協力を求めた。内訳として、男性5名、女性87名であり、年齢は 19.47 ± 1.50 歳であった。

(2) 調査内容

以下の質問紙を用いて、対象者に回答を求めた。

1) フェイスシート

年齢、性別、過去のスポーツ歴の有無（体育の授業等は除く）、現在のスポーツ活動の有無（体育の授業等は除く）、経験したことのあるスポーツ種目について回答を求めた。

2) 主観的な運動指導への自信感

運動指導に対して、「ある・どちらかといえばある・どちらかといえばない・ない」の4件法にて回答を求めた。また、その理由も自由記述にて回答を求めた。

3) 主観的健康度

自身の健康に対して、「非常に健康だと思う・健康だと思う・あまり健康ではない・健康ではない」の4件法にて回答を求めた。また、その理由も自由記述にて回答を求めた。

4) 運動有能感尺度（岡澤ら、1996）

岡澤ら（1996）が作成した運動有能感尺度を用いて、運動有能感を調査した。5件法にて回答を求めた。

5) 運動指導に関する質問

大友ら（2006）ならびに鬼澤（2017）が作成した「体育指導や運動に関する質問」の質問項目を保育者志望学生用に加筆・修正し、「あてはまる・ややあてはまる・あまりあてはまらない・あてはまらない」の4件法にて回答を求めた。

6) 運動指導に関する心配ごとに関する質問（木原ら、2002）

木原ら（2002）が作成した運動指導に関する心配ごとに関する質問を、保育者志望学生用に加筆・修正し、質問項目を作成し、「心配である・やや心配である・あまり心配でない・心配でない」の4件法にて回答を求めた。

(3) 分析方法

得られた回答について、SPSS ver.22にて統計解析を行った。身体的有能さの認知、統制感、受容感、運動有能感に関しては、得られた回答を基に高群と低群の2群に分け、統計解析を行った。

(4) 倫理的配慮

対象者全員に質問紙への回答前に本研究の趣旨、個人が特定されるようなことはないことについて説明を行った。同意できる者のみ回答を求め、記入を行ってもらった。

結 果

過去のスポーツ歴と運動有能感、主観的な運動指導への自信感、主観的健康度、運動指導に関する心配ごとについて、対応のないt検定を行ったところ身体的有能さの認知、運動有能感の合計において、0.1%水準で有意な差が認められた。また、受容感および運動遊びに対する意識において、1%水準で有意な差が認められた。そして、主観的な運動指導への自信感において、5%水準で有意な差が見られた。そのほかは有意な差が認められなかった（表1）。

身体的有能さの認知と主観的な運動指導への自信感、主観的健康度、運動指導に関する心配ごとについて、対応のないt検定を行ったところ主観的な運動指導への自信感、運動遊びに対する意識、運動指導の自己評価、運動指導に関する理解、技能指導、振る舞いにおいて、0.1%水準で有意な差が見られた。また、指導力を高める意欲、子どもからの好意的な評価、模範ができない種目の教示、子どもの把握、同僚からの受け入れ、技能向上の指導、ニーズへの対応において、1%水準で有意な差が見られた。そのほかは有意な差が認められなかった（表2）。

表 1 : 過去のスポーツ歴と各項目との関係

		過去のスポーツ歴：有群		過去のスポーツ歴：無群		t値
		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	
運動有能感	身体的有能さの認知	11.36	3.92	7.73	3.06	3.97 ***
	統制感	14.96	3.35	13.50	2.52	1.88 n.s.
	受容感	15.19	2.37	13.45	2.58	2.92 **
	運動有能感の合計	41.50	7.88	34.68	6.84	3.65 ***
主観的な運動指導への自信感		1.81	0.75	1.36	0.58	2.59 *
主観的健康度		2.76	0.65	2.82	0.39	-0.42 n.s.
運動指導に関する質問	運動遊びの重要性	3.70	0.46	3.68	0.48	0.16 n.s.
	運動遊びに対する意識	5.76	1.74	4.36	1.53	3.37 **
	運動指導の自己評価	5.00	1.44	4.41	1.33	1.70 n.s.
	運動指導に関する理解	7.21	1.48	6.64	1.53	1.58 n.s.
	指導力を高める意欲	7.00	2.06	6.59	1.89	0.83 n.s.
	運動保育に対する意識	9.87	1.46	9.95	1.53	-0.23 n.s.
	子どもの活動への共感	7.01	1.06	7.05	0.90	-0.12 n.s.
	子どもの安全への配慮	3.19	0.86	3.18	0.66	0.02 n.s.
	子どもの不得意への配慮	3.03	0.82	3.23	0.53	-1.07 n.s.
	運動への理解	3.07	0.69	3.23	0.69	-0.93 n.s.
運動指導に関する心配ごと	行事予定の理解	2.70	0.94	3.00	0.69	-1.62 n.s.
	子どもからの好意的な評価	2.89	0.75	3.18	0.66	-1.65 n.s.
	模範ができない種目の教示	3.37	0.76	3.36	0.58	0.04 n.s.
	子どもの把握	3.07	0.80	3.36	0.66	-1.55 n.s.
	子どもの行動統制	3.24	0.67	3.32	0.57	-0.48 n.s.
	子どもへの悪影響	2.76	0.94	2.82	0.66	-0.34 n.s.
	子どものつまづきへの対応	3.00	0.70	3.14	0.56	-0.83 n.s.
	運動用具などの管理	2.80	0.84	2.82	0.66	-0.09 n.s.
	同僚からの受け入れ	3.04	0.86	3.09	0.53	-0.32 n.s.
	技能指導	3.10	0.73	3.27	0.70	-0.98 n.s.
振る舞い	3.13	0.83	3.32	0.65	-0.98 n.s.	
技能向上の指導	3.09	0.74	3.32	0.57	-1.36 n.s.	
ニーズへの対応	2.97	0.74	3.05	0.65	-0.42 n.s.	

***: p<.001, **: p<.01, *: p<.05, n.s.: not significant

日比：保育者志望学生の運動有能感と運動指導への自信や意識・主観的健康度との関連性について

表2：身体的有能さの認知と各項目の関係

	身体的有能さの認知：高群		身体的有能さの認知：低群		t値	
	M	SD	M	SD		
主観的な運動指導への自信感	2.04	0.76	1.37	0.53	4.93 ***	
主観的健康度	2.80	0.69	2.74	0.49	0.52 n.s.	
運動指導に関する質問	運動遊びの重要性	3.74	0.44	3.65	0.48	0.90 n.s.
	運動遊びに対する意識	6.65	1.29	4.20	1.31	9.08 ***
	運動指導の自己評価	5.46	1.33	4.26	1.29	4.38 ***
	運動指導に関する理解	7.83	1.45	6.33	1.16	5.49 ***
	指導力を高める意欲	7.39	2.03	6.41	1.90	2.39 **
	運動保育に対する意識	10.15	1.32	9.63	1.58	1.72 n.s.
	子どもの活動への共感	7.15	0.94	6.89	1.08	1.23 n.s.
	運動指導に関する心配ごと	子どもの安全への配慮	3.11	0.85	3.26	0.77
子どもの不得意への配慮		3.04	0.73	3.11	0.80	-0.41 n.s.
運動への理解		3.11	0.67	3.11	0.71	0.00 n.s.
行事予定の理解		2.65	0.92	2.89	0.85	-1.29 n.s.
子どもからの好意的な評価		2.76	0.77	3.15	0.67	-2.62 **
模範ができない種目の教示		3.22	0.76	3.52	0.66	-2.06 **
子どもの把握		2.96	0.79	3.33	0.73	-2.33 **
子どもの行動統制		3.13	0.69	3.39	0.58	-1.97 n.s.
子どもへの悪影響		2.72	0.89	2.83	0.88	-0.59 n.s.
子どものつまづきへの対応		3.00	0.63	3.07	0.71	-0.46 n.s.
運動用具などの管理		2.78	0.87	2.83	0.74	-0.26 n.s.
同僚からの受け入れ		2.89	0.80	3.22	0.76	-2.01 **
技能指導		2.93	0.71	3.35	0.67	-2.86 ***
振る舞い		2.91	0.86	3.43	0.62	-3.33 ***
技能向上の指導	2.98	0.71	3.30	0.66	-2.27 **	
ニーズへの対応	2.83	0.68	3.15	0.73	-2.22 **	

***: p<.001, **: p<.01, *: p<.05, n.s.: not significant

統制感と主観的な運動指導への自信感、主観的健康度、運動指導に関する心配ごとについて、対応のないt検定を行ったところ運動遊びに対する意識、運動指導の自己評価において、0.1%水準で有意な差が見られた。また、主観的な運動指導への自信感、運動遊びの重要性、運動指導に関する理解、運動保育に対する意識、子どもの活動への共感において、1%水準で有意な差が見られた。さらに、振る舞いにおいて、5%水準で有意な差が見られた。そのほかは有意な差が認められなかった(表3)。

表3：統制感と各項目の関係

	統制感：高群		統制感：低群		t値	
	M	SD	M	SD		
主観的な運動指導への自信感	1.91	0.81	1.50	0.59	2.80 **	
主観的健康度	2.83	0.61	2.72	0.58	0.88 n.s.	
運動指導に関する質問	運動遊びの重要性	3.80	0.40	3.59	0.50	2.31 **
	運動遊びに対する意識	6.26	1.42	4.59	1.73	5.07 ***
	運動指導の自己評価	5.37	1.40	4.35	1.29	3.64 ***
	運動指導に関する理解	7.57	1.67	6.59	1.15	3.28 **
	指導力を高める意欲	7.09	2.02	6.72	2.02	0.88 n.s.
	運動保育に対する意識	10.20	1.34	9.59	1.54	2.02 **
	子どもの活動への共感	7.26	0.85	6.78	1.11	2.31 **
	運動指導に関する心配ごと	子どもの安全への配慮	3.26	0.88	3.11	0.74
子どもの不得意への配慮		3.07	0.77	3.09	0.76	-0.14 n.s.
運動への理解		3.17	0.64	3.04	0.73	0.91 n.s.
行事予定の理解		2.80	0.88	2.74	0.91	0.35 n.s.
子どもからの好意的な評価		2.87	0.75	3.04	0.73	-1.13 n.s.
模範ができない種目の教示		3.33	0.79	3.41	0.65	-0.58 n.s.
子どもの把握		3.09	0.84	3.20	0.72	-0.67 n.s.
子どもの行動統制		3.24	0.67	3.28	0.62	-0.32 n.s.
子どもへの悪影響		2.67	0.87	2.87	0.88	-1.07 n.s.
子どものつまづきへの対応		2.96	0.73	3.11	0.60	-1.09 n.s.
運動用具などの管理		2.74	0.80	2.87	0.81	-0.78 n.s.
同僚からの受け入れ		3.04	0.87	3.07	0.71	-0.13 n.s.
技能指導		3.07	0.74	3.22	0.70	-1.01 n.s.
振る舞い		3.02	0.91	3.33	0.63	-1.87 *
技能向上の指導	3.09	0.76	3.20	0.65	-0.74 n.s.	
ニーズへの対応	2.87	0.69	3.11	0.74	-1.61 n.s.	

***: p<.001, **: p<.01, *: p<.05, n.s.: not significant

受容感と主観的な運動指導への自信感、主観的健康度、運動指導に関する心配ごとについて、対応のないt検定を行ったところ運動遊びに対する意識、子どもの行動統制において、0.1%水準で有意な差が見られた。また、主観的な運動指導への自信感、運動指導の自己評価、運動指導に関する理解、運動保育に対する意識、子どもからの好意的な評価、子どもの把握、同僚からの受け入れ、振る舞い、ニーズへの対応において、1%水準で有意な差が見られた。さらに、指導力を高める意欲、模範ができない種目の教示において、5%水準で有意な差が認められた。そのほかは有意な差が認められなかった(表4)。

日比：保育者志望学生の運動有能感と運動指導への自信や意識・主観的健康度との関連性について

表4：受容感と各項目との関係

	受容感：高群		受容感：低群		t値	
	M	SD	M	SD		
主観的な運動指導への自信感	1.87	0.75	1.54	0.69	2.17 **	
主観的健康度	2.87	0.58	2.67	0.60	1.59 n.s.	
運動指導に関する質問	運動遊びの重要性	3.70	0.47	3.70	0.47	0.00 n.s.
	運動遊びに対する意識	6.11	1.66	4.74	1.65	3.96 ***
	運動指導の自己評価	5.30	1.44	4.41	1.29	3.12 **
	運動指導に関する理解	7.54	1.63	6.61	1.22	3.12 **
	指導力を高める意欲	7.26	1.97	6.54	2.02	1.72 *
	運動保育に対する意識	10.20	1.33	9.59	1.56	2.02 **
	子どもの活動への共感	7.15	0.99	6.89	1.04	1.23 n.s.
	子どもの安全への配慮	3.13	0.78	3.24	0.85	-0.64 n.s.
運動指導に関する心配ごと	子どもの不得意への配慮	2.98	0.77	3.17	0.74	-1.24 n.s.
	運動への理解	3.04	0.59	3.17	0.77	-0.91 n.s.
	行事予定の理解	2.67	0.84	2.87	0.93	-1.05 n.s.
	子どもからの好意的な評価	2.78	0.73	3.13	0.72	-2.31 **
	模範ができない種目の教示	3.24	0.74	3.50	0.69	-1.75 *
	子どもの把握	2.89	0.85	3.39	0.61	-3.24 **
	子どもの行動統制	3.00	0.63	3.52	0.55	-4.23 ***
	子どもへの悪影響	2.72	0.91	2.83	0.85	-0.59 n.s.
	子どものつまづきへの対応	2.93	0.61	3.13	0.72	-1.41 n.s.
	運動用具などの管理	2.78	0.84	2.83	0.77	-0.26 n.s.
	同僚からの受け入れ	2.87	0.83	3.24	0.71	-2.30 **
	技能指導	3.02	0.71	3.26	0.71	-1.61 n.s.
振る舞い	2.93	0.85	3.41	0.65	-3.02 **	
技能向上の指導	3.02	0.68	3.26	0.71	-1.64 n.s.	
ニーズへの対応	2.76	0.64	3.22	0.73	-3.20 **	

***: p<.001, **: p<.01, *: p<.05, n.s.: not significant

運動有能感の合計と主観的な運動指導への自信感、主観的健康度、運動指導に関する心配ごとについて、対応のないt検定を行ったところ、主観的運動指導への自信感、運動遊びに対する意識、運動指導の自己評価において、0.1%水準で有意な差が認められた。また、運動遊びの重要性、運動指導に関する理解、子どもの行動統制、振る舞いにおいて、1%水準で有意な差が認められた。さらに、技能指導、ニーズへの対応において、5%水準で有意な差が認められた。そのほかには有意な差はみられなかった（表5）。

表5：運動有能感の合計と各項目との関係

		運動有能感の合計：低群		運動有能感の合計：高群		t値
		M	SD	M	SD	
主観的な運動指導への自信感		2.02	0.77	1.39	0.54	4.54 ***
主観的健康度		2.83	0.64	2.72	0.54	0.88 n.s.
運動指導に関する質問	運動遊びの重要性	3.72	0.46	3.67	0.47	0.45 **
	運動遊びに対する意識	6.50	1.41	4.35	1.45	7.22 ***
	運動指導の自己評価	5.43	1.38	4.28	1.26	4.19 ***
	運動指導に関する理解	7.78	1.49	6.37	1.16	5.07 **
	指導力を高める意欲	7.20	2.05	6.61	1.96	1.40 n.s.
	運動保育に対する意識	10.11	1.35	9.67	1.56	1.43 n.s.
	子どもの活動への共感	7.20	0.93	6.85	1.07	1.66 n.s.
	子どもの安全への配慮	3.15	0.84	3.22	0.79	-0.38 n.s.
	子どもの不得意への配慮	3.09	0.76	3.07	0.77	0.14 n.s.
	運動への理解	3.15	0.70	3.07	0.68	0.61 n.s.
運動指導に関する心配ごと	行事予定の理解	2.80	0.93	2.74	0.85	0.35 n.s.
	子どもからの好意的な評価	2.85	0.79	3.07	0.68	-1.42 n.s.
	模範ができない種目の教示	3.28	0.78	3.46	0.66	-1.16 n.s.
	子どもの把握	2.98	0.80	3.30	0.73	-2.04 n.s.
	子どもの行動統制	3.15	0.70	3.37	0.57	-1.63 **
	子どもへの悪影響	2.65	0.87	2.87	2.89	-1.31 n.s.
	子どものつまづきへの対応	3.00	0.70	3.07	0.65	-0.46 n.s.
	運動用具などの管理	2.78	0.84	2.83	0.77	-0.26 n.s.
	同僚からの受け入れ	2.96	0.82	3.15	0.76	-1.19 n.s.
	技能指導	3.00	0.73	3.28	0.69	-1.91 *
振る舞い	3.00	0.87	3.35	0.67	-2.14 **	
技能向上の指導	3.02	0.75	3.26	0.65	-1.64 n.s.	
ニーズへの対応	2.85	0.67	3.13	0.75	-1.91 *	

***: p<.001, **: p<.01, *: p<.05, n.s.: not significant

また、主観的な運動指導への自信感、主観的健康感の高群と低群が運動有能感によってどのように規定されるのかを調べるために、目的変数を主観的な運動指導への自信感、主観的健康感の高群と低群、説明変数を運動有能感の3因子を設定し、判別分析を行なった。結果は以下の表の通りである。主観的な運動指導への自信感の高群には身体的有能さの認知および統制感が関係していること、低群には受容感が関係していることが明らかとなった。交差妥当性の検証の結果、判別の中率は77.2%であった(表6)。主観的健康感の高群には身体的有能さの認知が関係していること、低群には統制感および受容感が関係していることが明らかとなった。交差妥当性の検証の結果、判別の中率は64.1%であった(表7)。

日比：保育者志望学生の運動有能感と運動指導への自信や意識・主観的健康度との関連性について

表6：主観的な運動指導への自信感と運動有能感の判別分析結果

標準化された正準判別関数係数	
身体的有能さの認知	1.011
統制感	.190
受容感	-.380

表7：主観的健康感と運動有能感の判別分析結果

標準化された正準判別関数係数	
身体的有能さの認知	0.508
統制感	-1.106
受容感	.916

考 察

過去のスポーツ歴の有無によって、身体的有能さの認知、受容感、運動有能感の合計において有意な差が認められた。また、主観的な運動指導への自信感、運動遊びに対する意識においても有意な差が見られた。過去にスポーツ活動を継続的に経験していない学生は、全般的に運動有能感が低いことが本研究の結果として示されている。それに伴って、運動指導の自信感や運動遊びに対する意識も低くなっていると考えられる。全ての学生は高等学校卒業までに、授業の中で保健体育科の授業を履修してきている。しかしながら、運動有能感や指導への自信に差が出ることは、過去のスポーツ歴、特に運動部活動の経験が大きく影響を与えていると考えられる。小林ら（2018）も、運動有能感が低い者と高い者の違いとして、運動部活動の経験が関係していることを指摘している。また、スポーツ経験が不足している運動部活動の経験がないものにとっては、運動有能感が得られにくいだけでなく、運動の習慣化にも影響することを示唆している。このように、運動やスポーツ経験を積むことは、自らの運動有能感を高める大きな要因となることが考えられる。また、この運動有能感は、保育者自身の運動指導への基盤となることが考えられ、運動指導への自信や運動遊びに対する意識の高まりにもつながっていくと考えられる。過去に運動やスポーツを体育の授業以外で継続的に行っていない学生や経験していない学生はこのような点で課題を抱え、幼児体育やスポーツ実技などの授業に臨んでいることが考えられる。また、現場に出た時には、運動有能感が低いことから、運動指導に対する自信や運動遊びに対する意識に影響を及ぼし、結果として、子どもたちの指導にも影響を及ぼすことも指摘できる。

運動有能感の各因子および合計点の高群と低群によって、共通して、主観的な運動指導への自信感、運動遊びに対する意識、運動指導の自己評価、運動指導に関する理解、振る舞いについて有意な差が見られた。このことから、運動有能感は保育者になった際に運動指導に携わる上で非常に重要な要因となっていることがいえる。実際に運動指導に対して自信がある、またはどちらかといえばあると答えた者の理由をしてみると、「様々なスポーツを経験してきたから」、「体を動かすことが好きで、子どもたちと遊ぶことが好きだから」、「今までスポーツをし

てきて成功した経験があるから」、「運動することが好きだから」、「自分自身が運動をしてきたので、それを生かせると思うから」、「体力には自信があるから」など、運動やスポーツ活動における成功体験の経験やポジティブなイメージの記述が見られた。一方で、どちらかといえばない、自信がないと答えた者の理由を見てみると、「運動が苦手だから」、「運動が得意ではないから」、「人に教えられるほど得意ではないから」、「体力や技術がないから」、「知識がないから」など、運動やスポーツ活動における技術や体力面での不安やネガティブなイメージの記述が見られた。また、運動遊びに対する意識や、運動指導の自己評価、運動指導に関する理解も、運動有能感が高い群のほうが高い値を示しており、運動有能感が運動への態度や意識、運動指導に対する意識に大きな影響を及ぼしていることがいえる。これらのことから示されるように、主観的な運動指導への自信感が高い者は、運動やスポーツ活動に対してポジティブなイメージや自信、運動有能感を高く認知しており、特に運動有能感の1因子である、自己の運動能力や技能に対する肯定的な認知、「自分はできるという自信」である身体的有能さの認知が高いと考えられる。武田（2005）は、児童の体力水準と運動有能感について調査を行なっているが、この2つには正の相関があることを明らかにしており、また、身体的有能さの認知の形成と体力水準には密接な関係があるとも報告している。体力を高めるためにはその者自身が運動やスポーツ活動を行わなければならない。本研究においても、運動有能感が高い者は、運動指導への自信感が高く、その高い群の中の記述を見ても、体力に自信があると行った記述や、運動やスポーツ活動に対してポジティブなイメージを持っている者が多いことが明らかとなっている。保育者志望学生が、保育者となる時に運動有能感は、保育場面における運動指導に対する自信や意識に影響を及ぼす1つの要因となりうるものがここからいえる。また、保育者志望学生の運動やスポーツ活動に参加する態度や意識にも影響を及ぼすことが考えられる。

さらに、判別分析の結果、主観的な運動指導への自信感の高群には身体的有能さの認知および統制感が関係していること、低群には受容感が関係していることが明らかとなった。このことから、運動指導への自信感が高い者は、今までの運動やスポーツ活動の経験から、運動有能感が高く、特に身体を動かすことによって得ることができる身体の有能さの認知が、運動指導に対する自信に大きく影響を及ぼすことが考えられる。

一方で、主観的健康感と運動有能感の関係は対応のないt検定を行ったところ、有意な差が見られず、運動有能感の高低では関係がなかったといえる。しかしながら、判別分析の結果、主観的健康感の高群には身体的有能さの認知が関係していること、低群には統制感および受容感が関係していることが示されていることから、自己の運動能力や技能に対する肯定的な認知、「自分はできるという自信」である身体的有能さの認知が高いことは、運動やスポーツ活動、運動指導だけでなく、自らの身体の知覚・認知にも影響を及ぼしている可能性がここから示唆される。

まとめ

本研究では、保育者志望学生の運動有能感と運動指導への自信や意識、そして主観的健康度の関係について、調査を行ない、次のことが明らかとなった。①過去のスポーツ歴の有無が運動有能感、主観的な運動指導への自信感到影響を及ぼすこと。②運動有能感は主観的な運動指導への自信感、運動遊びに対する意識や、運動指導に関する理解など、運動への態度や意識や運動指導に対する意識にも大きな影響を及ぼしていること。特に、身体的有能さの認知が大きな影響を及ぼしていることが示唆された。③主観的健康感と運動有能感の関係は、運動有能感の高低によって主観的健康感に差はなかったが、主観的健康感には身体的有能さの認知が影響を及ぼしている可能性が示唆された。これらのことから、運動有能感は、保育場面における運動指導に対する自信や意識に影響を及ぼす1つの要因となりうることや、保育者志望学生の運動やスポーツ活動に参加する態度や意識にも影響を及ぼすことが明らかとなった。

さらに、保育者志望学生が運動指導に対して自信感を持つためには、運動有能感を高めるような授業実践が必要であると考えられる。例えば、丸井ら（2015）のように、学生のレディネスに配慮したグルーピングを行い、安心して学び合える友人と積極的に活動できる雰囲気での授業を行う工夫や、上江洲ら（2011）のように、継続的にフィードバックを行うことが挙げられる。これらのような運動有能感を高めるような工夫を授業担当者が取り入れていくことによって、保育者志望学生の運動有能感が高まり、運動指導への自信や運動への態度や意識が高まることを期待される。

また、今回の研究では、横断的な調査のみであり、スポーツ実技等の授業による運動有能感の影響や、入学時から教育実習を経た卒業時との比較など、縦断的な比較を行うことができなかった。今後の研究では、横断的でなく、縦断的な変化についても、その要因の検討とともに調査を行う必要もあると考えられる。そして、授業担当者の授業の工夫が保育者志望学生の運動有能感を高め、運動指導への自信や、主観的健康度を向上させるにはどのようなアプローチ方法が有効であるかということについても、今後の研究で明らかにしていく必要があると考えられる。

参考文献

- ・ スポーツ庁「平成30年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果」
- ・ スポーツ庁「平成28年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果」
- ・ 杉原隆・森司郎・吉田伊津美（2004）「幼児の運動能力発達の年次推移と運動能力発達に関与する環境要因の構造的分析」平成14～平成15年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書
- ・ 岡沢祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎（1996）「運動有能感の構造とその発達及び性差に関する

研究」 スポーツ教育学研究 16 (2) pp.145-155

- ・ 中曽根裕 (2018) 「保育士の身体的有能さの認知と運動あそびとの関連性」 仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文集 19 pp.155-164
- ・ 群馬県小学校体育研究会調査委員会・大友智 (2006) 「群馬県における小学校体育授業に関する基礎的研究：高学年を対象にして」 群馬県学校体育研究連合会 群馬の学校体育 52 pp.33-47
- ・ 鬼澤陽子・安原志帆・内藤年伸 (2016) 「小学校の体育授業の充実を目指した基礎的研究」 群馬大学教育学部紀要芸術・技術・体育・生活科学編 52 pp.71-86
- ・ 木原成一郎・松田泰定 (2002) 「教育実習生の体育科指導における心配に関する調査研究 (教師教育・教員養成)」 学校教育実践学研究 8 pp.1-8
- ・ 小林薫・柊幸伸 (2018) 「大学生における運動有能感の高低と運動習慣および健康関連指標に関する調査」 理学療法科学 33 (1) pp.55-58
- ・ 武田正司 (2005) 「児童における体力と運動有能感との関係」 盛岡大学紀要 22 pp.41-47
- ・ 丸井一誠・井邑智哉 (2015) 「女子短大生における幼児への運動遊びの指導に関するグループ学習の効果－運動有能感と心配に着目して－」 金沢星稜大学人間科学研究 9 (1) pp.31-34
- ・ 上江洲隆裕・岡澤祥訓・木谷博記 (2011) 「教師の言語活動による「継続的フィードバック」が技能成果、運動有能感に及ぼす影響に関する研究－走り幅跳びの授業実践を通して－」 教育実践総合センター研究紀要 20 pp.159-166